

自閉スペクトラム症児における問題解決的要求言語行動の形成

○下山 真平
 (東京学芸大学教育学研究科)
 KEY WORDS: 自閉スペクトラム症 問題解決 要求言語行動

小笠原 恵
 (東京学芸大学)

【目的】 DSM-5では、自閉スペクトラム症の特徴として、小さな変化に対する極度の苦痛、移行することの難しさ、同一性への固執や習慣への頑ななこだわりが挙げられている。これまでの研究において、自閉スペクトラム症児は、予定変更時(東, 2002)、活動移行時(林・井澤, 2012)、新規刺激の提示時及び活動の切り替え時(松下・園山, 2013)等に行動問題や困難さを示す場合があることが指摘されており、それらの低減を図るために支援者が先行子や結果の操作を行うことが多い。このようなアプローチを行う場合、支援者が常に存在していることが前提となるが、実際の生活場面では必ずしも支援者が存在している保障はない。

そこで本研究では、予定された活動に従事できない状況において、直面した問題に自らアプローチすることで、何もすることができない事態を回避する言語行動の獲得について検討した。

【方法】 1. 対象児: M児。2016年4月現在、特別支援学校高等部第2学年に在籍する知的障害を伴う自閉スペクトラム症女児。田中ビネー知能検査Vの結果、IQ:32、MA:5歳3カ月であった。2. 標的行動: 予定していた活動に従事できない状況において、文脈に合った代替物(事物・場所・人物)の要求言語行動を標的行動とした。3. アセスメント: 好みの活動について特定した。保護者に対して行ったアンケート結果から、M児が好むと思われる活動を数種類選定した上で行動観察を実施した。M児がそれぞれの活動に従事した回数により、「パソコン」と「バランスボール」を好みの活動とした。4. 指導手続き: 30分間の個別指導において、「パソコン」と「バランスボール」の活動に対してそれぞれ故障場面(パソコンやバランスボールが壊れていて使えない場面)、場所使用不可場面(使用する予定の部屋が使用中もしくは鍵がかかっている場面)、欠員場面(一緒に活動する予定だった人がいない場面)を設定した。(1)パソコン故障場面: M児と面識のあるセラピスト(Th)のプロフィールと故障しているパソコンを提示し、wordに入力するよう指示した。10秒遅延後、標的行動が生起しない場合には、「パソコンがつかえませんが、べつのパソコンにします。」と書かれたカードによりプロンプトを行った。(2)バランスボール故障場面: 空気が入っていないバランスボールを提示した。プロンプトは「バランスボールがつかえませんが、べつのバランスボールにします。」と書かれたカードで行った。(3)パソコン場所使用不可場面: あらかじめ決めていた使用できない部屋で word 入力するよう指示し、移動を促した。10秒遅延後、標的行動が生起しない場合には、「へやがつかえませんが、べつのへやにします。」と書かれたカードによりプロンプトを行った。(4)バランスボール場所使用不可場面: パソコン場所使用不可場面と同様の手続きを行った。(5)パソコン欠員場面: あらかじめ決めていた Th のプロフィールの聞き取りをするように指示し、Thがいる予定の場所へ移動を促した。10秒遅延後、標的行動が生起しない場合には、「さがしているひとがいません。べつのひとにします。」と書かれたカードによりプロンプトを行った。(6)バランスボール欠員場面: バランスボールを一緒に行う予定の Th を誘うように指示し、Thがいる予定の場所へ移動を促した。以下、パソコン欠員場面と同様の手続きを行った。

尚、本研究の手続きを事前に保護者に説明した上で、研究に対して M 児の嫌悪がみられた場合には介入を中断する旨の了解

解を得た。また、毎セッション終了後に保護者と指導場面の様子及び指導前後の家庭での様子について情報交換をし、本研究が M 児の負担になっていないことを確認した。

【結果】 標的行動の生起状況を図1に示した。

【考察】 故障場面と場所使用不可場面において「パソコン」「バランスボール」のいずれの活動も標的行動が自発的に生起し、反応潜時も短縮した。しかし、パソコン欠員場面では標的行動の自発がみられず、バランスボール欠員場面においても安定しなかった。故障場面の弁別刺激は、壊れたパソコンやバランスボールの存在であり、場所使用不可場面の弁別刺激は、部屋を使用している他者の存在や鍵がかかっている部屋の状態である。一方で、欠員場面においては探している人が「存在しないこと」が弁別刺激になることから、弁別刺激の形態の違いが標的行動の生起に影響した可能性が考えられる。また、欠員場面における誤反応は全て「別の部屋にします」という言語行動によるものであった。本研究は各場面の手続きを連続して試行したことにより、直前の学習である場所使用不可場面における試行が変数として欠員場面の学習に影響を及ぼした可能性が高い。

【結論】 本研究中、外出場面においてM児の嫌悪刺激である幼児の騒ぎ声が聞こえた際に「うるさいので向こうに行きます」という言語行動が生起したというエピソードが保護者から報告された。しかし、指導場面では、指導開始から終了まで同一の手続きによる介入を行ったため、般化の状況を確認できていない。誰に対しても、異なる環境でも標的行動が生起するか詳細な検討を加える必要がある。また、各場面における試行が影響を及ぼし合わない、より統制された条件を設定することが課題として残った。

【文献】 1) 東俊一(2002)自閉症児の予定変更に関する拒否の抑制. 日本行動分析学会第20回年次大会発表論文集, P-10. 2) 林周一郎・井澤信三(2012)活動移行時に激しい行動問題を示す自閉症児に対する先行子操作と結果操作による介入. 特殊教育学研究 50(1), 45-54. 3) 松下浩之・園山繁樹(2013)新規刺激の提示や活動の切り替えに困難を示す自閉性障害児における活動スケジュールを用いた支援. 特殊教育学研究 51(3), 279-289. (SHIMOYAMA Shinpei, OGASAHARA Kei)

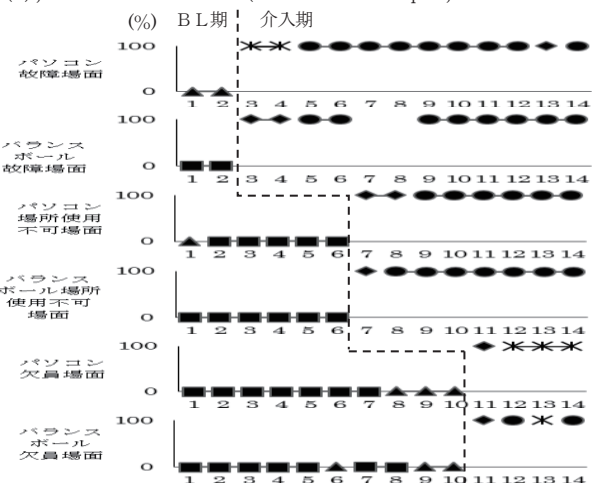


図1 各場面における標的行動の生起状況 (セッション)

■ 無反応 ▲ 誤反応 ● 自発
 ◆ 無反応+プロンプト * 誤反応+プロンプト